2月

しなやかに一歩先へ

教務主任　　本田 一枝

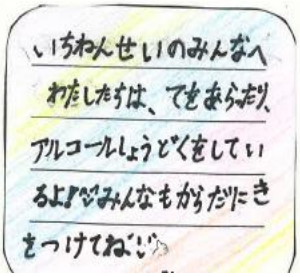
「レジリエンス」という言葉を初めて聞いたのは、東京パラリンピックが開催されていた頃でした。聞き慣れない英語はすぐに忘れてしまうのですが、この言葉の象徴としてテレビ番組でとりあげられていたパラアスリートの考え方や生き方が印象深く、頭から離れることはありませんでした。

「レジリエンス（resillience）」は、「回復力」「弾性（しなやかさ）」と訳されています。近年では、「困難や脅威に直面している状況に対してしなやかに適応して生き延びる力」という意味で使われています。

義足のパラアスリート、マリーアメリ・ルフェール選手は、2008年からパラリンピック 3 大会連続出場。幅跳びで世界記録を 2 回更新し、金メダルを獲得という輝かしい経歴の持ち主です。ルフェール選手は、15 歳のときに交通事故にあって片足を切断し、消防士になる夢をあきらめざるを得ませんでした。非常に辛い状況の中で、障害を受け入れ、時にあきらめ、時に向き合う中で「困難な状況でも生き抜く力」＝「レジリエンス」が備わったのでしょう。

さて、金沢小学校の子ども達はどうでしょうか。私は、この「レジリエンス」が高まっていると感じています。子ども達が楽しみにしているのに思うようにできていなかったことの一つに「他学年との交流」があります。今年度は子ども達の「あきらめない心」と「創意工夫」で様々な交流をすることができています。

学校保健委員会では、日頃学級で自分たちが行っているコロナ対策をペア学年（1・6年、2・4年、3・5年）で伝え合いました。



メッセージカードを見ると、「コロナにまけずにがんばろう！」「みんなもからだにきをつけてね」などと励ましの言葉も付け足されています。感染症対策もみんなが頑張っていると知ると前向きな気持ちでとらえられるようになりました。

児童運営委員会では、「えがお」をテーマに活動してきましたが、ペア学年の交流だけでは全校の心がつながったことにはならないのではないかという意見から、それぞれの学年のことをテレビ放送で紹介し合うことになりました。名付けて「金小スマイルプロジェクト」です。

学年の遠足の行き先や人気の給食などのクイズが出されると、テレビ画面を前で真剣に考えたり、拍手を送ったりしています。その姿を見て、金沢小学校全体が明るい気持ちで少しずつ前に進んでいることを実感しました。

新型コロナウイルスの感染が再び拡大している今、この現状を憂い嘆くのではなく、一歩先を見て歩き出す力が問われていると感じています。